

イワシ漁業の生みの親は綿だった

絵と文・熱田親憲 題字・熱田素華

紀伊・房総

くろしお物語

◇3◇

NHK大河ドラマ「麒麟がくる」(放送休止中)の舞台となっている戦国時代、特に16世紀後半は「衣料革

も、木綿に注目が集まるようになったのである。

染色のしやすさや着心地の良さ、高い保湿性と保湿性による快適さが、木綿採用の理由でした。加工性にも優れ、収穫して原糸にするまで手間が掛からな

いのも特長です。侍の兵衣をはじめ陣幕、旗、職などの軍事用品にまで木綿が求められ、遠方への行軍や長きにわたる滞陣を有利にしました。それら特長から、庶民の衣服にも木綿が広がっていくことになりました。

江戸時代に入ると摂津や河内、和泉が全国一の綿作の中心地となり、綿畑優先の耕作が行われました。綿は連

江門時代に入ると摂津や河内、和泉が全国一の綿作の中心地となり、綿畑優先の耕作が行われました。綿は連

畑の魚肥として増産

作障害の少ない作物ではありませんが、生産性を上げるために綿畑1反(約300坪)につき、魚肥としてイワシの肥料(干鰯)を1石(約180kg)も投下して、増産に精を出す農家も現れました。ち

ようど各地の大名らが推し進めていた「新田開発」に伴う「複合農業」の振興策と相まって、木綿増産が干鰯増産につながり、さらにイワシ漁業の発展に連なっていくことになり

肥料の三要素と言われるようになります。16世紀末、大阪の干鰯問屋は将来性を感じて漁具や漁船費用まで賄って紀州や和泉、摂津の漁師たちにイワシの出漁を奨励しました。そのため、関西の漁場はたちまちイワシが枯渇してしまい、四国・九州から五島列島まで出漁。ここでも乱獲が続く、江戸時代初期にイワシ漁は行き詰ってしまいました。当時はまだ、資源の枯渇



多大量津村で大量生産されていたとのこと。当地は綿耕作地として水はけのよい砂地で、イワシの干場が豊富だったためです。東大阪の石切神社近くの工房では、河内木綿の手織りが今でも見られるとのことです。

天然素材としての綿には、産業的価値と文化的側面があります。今回、機能・産業面から綿を見てきました。私が、私は文化面にも注目したいと思います。